

取り残された住宅の再利用方法 「歴史、私史インテンション」による手法を用いて

本計画の舞台は祖母が暮らしてきた住宅（たかの家）である。たかの家は戦後東下町市田小町に位置しており、築55年程の住宅である。約10年前に老朽化から、祖母が一人暮らしを辞め、現在は賃貸としてふるまわれないと判断し、祖母はたかの家から別の住宅に移り住んだ。その結果、たかの家は取り残された状況のまま現在に至る。

01 住宅における再利用のリソース problem

日本が縮小時代に入り、たかの家のように取り残されるケースが多くなった結果、現在リノベーションやコンバージョンなどが注目を浴びている。そうした住宅の再利用行為の根底には「建物の時間を進めていく」といった「継承性」と「更新性」が含まれている。

しかし、多くの再利用事例は再利用以前の建物と何も関わりをもたない、もしくは単に価値を踏襲することが大半である。その要因として、形のある「オブジェクト」をリソースと考えていることが挙げられる。オブジェクト、例えば木材は何もせずとも年月が経つにつれて、腐朽していく。そうした腐朽したオブジェクトによって継承すること、更新することは共に困難であり、建築における再利用のリソースとして適していない。ただし、ここでオブジェクト自体を再利用することを否定したのではなく、オブジェクトを建築に再利用する「リソース」として用いることを否定している。

さて、建物を形成する「オブジェクト」ではないリソースになり得るものとは何だろうか？



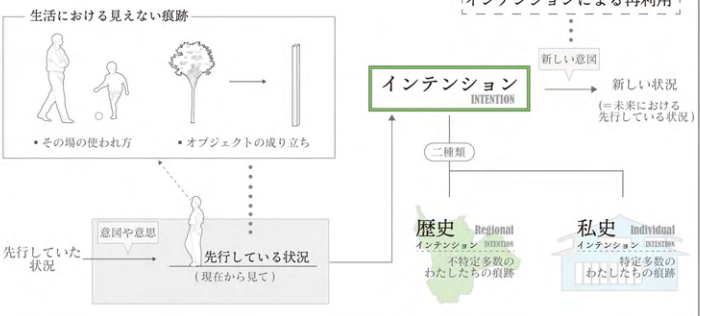
02 新しいリソース、インテンション concept

住宅は、ある人（たち）の暮らしの舞台である。再利用のリソースとして、暮らしが広がる中で生じる「見えない痕跡」にフォーカスを当てた。それはオブジェクトの表面に見ることができる劣化など表面上の「時間の流れ」ではなく、「時間の流れの中身」である。時間の流れの中身とは、例えば「ここは暖かい場所である」、「ここで遊んでいた」などの場所の使われ方、または「柱が裏山の本で製材されていた」といったオブジェクトの成り立ちまで様々である。それは「現在（いま）」という視点から見ると、先行している状況といえる。また、先行している状況は、その状況がつけられた時にいた人（たち）や自然の意図や意思により生まれている。例えば、先ほど挙げた「ここで遊んでいた」といった状況には、「楽しい遊具が多いから」といった、ある子供たちの意図や意思が込められている。そして先行している状況は意図を通して、私たちの記憶を形成しているのだ。こうした意図や意思が込められた、先行している状況を「インテンション」と名付けた。

そしてインテンションを用いた住宅の再利用とは、ある人が生み出したインテンションに対して、例えば私が意図を加えることである。そして将来、私が生み出したインテンションに、別の人が意図を加えて住宅の再利用を行うことができる。

オブジェクトを用いた再利用は、オブジェクトが腐朽すれば住宅の再利用が困難となる。一方で、インテンションは腐朽しないので再利用され続けていく限り、理論上、住宅は永久に存在し続けることが可能であるのだ。

また、インテンションにはインテンションの主題によって二種類に分類できる。一つ目は住宅が建つ地域に暮らしてきた先人たちが、その地域の地形などを形成する自然などの不特定多数の私たちがマクロな痕跡であり、それを歴史インテンションと呼称する。二つ目は住宅に暮らししてきた家族や、そこに訪れていた観客や設計者などの特定少数の私たちのミクロな痕跡であり、それを私史インテンションと呼称する。



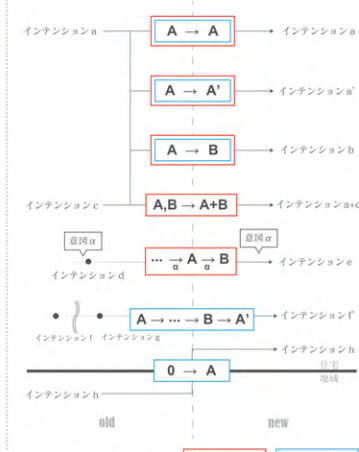
03 インテンションの活用手法 strategy

建築雑誌に掲載されている住宅の再利用事例をインテンションの観点から見ることで、インテンションの活用手法を構築した。



一つ一つの事例において、建築概要や建築写真からインテンションとそのインテンションをどのように活用したかを左図のように眺めることで、活用手法に共通点などが見られた。

結果的に、手法は合計八種類に分類可能であることが分析により分かった。またその内訳として歴史、私史インテンションともに見ることができる手法が四種類、歴史インテンションのみに見ることができる手法が二種類、私史インテンションのみに見ることができる手法が二種類あった。



A → A Aというインテンションに対して「そのままの状況にしておく」という意図を加えることで、Aというインテンションを再利用以前と同様に存在させる手法。

A → A' Aというインテンションに対して「そのままの状況に別の場所に移動させる」という意図を加えることで、Aというインテンションを再利用以前と同様の状況で、別の場所に存在させる手法。

A → A' Aというインテンションに対して「Aは現在のライフスタイルには適さないので、現在のライフスタイルに順じた状況に進化させる」という意図を加えることで、Aというインテンションを現在のライフスタイルに適応させる手法。

A → B Aというインテンションに対して「Aを想起させるような、異なるBという状況を持ち込むことで以前の状況を思い起こさせる」という意図を加えることで、AというインテンションをBというインテンションに置き換える手法。

A, B → A+B AとBというインテンションに対して「それぞれ異なる状況であるAの良さ、Bの良さを生かすことで、より良い状況をつくる」という意図を加えることで、A、Bというインテンションを融合させる手法。

α → α Aというインテンションに対して「A以前のインテンションにαという意図が追加されてきた」ことからAに再びαという意図を加える手法。

A → ... → B → A' Bという現インテンションに対して「超先行している状況であるインテンションAを復興することにより、その地域特有の暮らしや風景を思い起こさせる」という意図のもと、超先行しているインテンションAを現在のライフスタイルに合わせたインテンションA'として呼び起こす手法。

0 → A 住宅、敷地内には存在しないが、その地域に存在するAというインテンションを「地域の良さを対象住宅、敷地に持ち込むことで住環境をよくなる」という意図のもと、Aというインテンションを新しく住宅、敷地内に持ち込む手法。

04-a 歴史インテンション

research

たかの家が建つ岐阜県下呂市小坂町の歴史インテンションを抽出する。

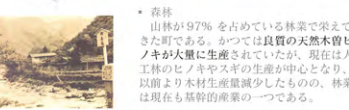
岐阜県下呂市小坂町は天寿の森林資源、渓谷と数々の滝、そして特色ある泉をもつ温泉など、自然に恵まれた「緑と清流といふのまち」である。また、自然に恵まれた小坂町は四季折々楽しむことができる。

小坂町の人口は男性1363人、女性1432人で合計2795人である。また世帯数は1098世帯(2022年4月1日時点)である。全国的に見られる**少子高齢化**、そして中心への人口流出が顕著に起きている。

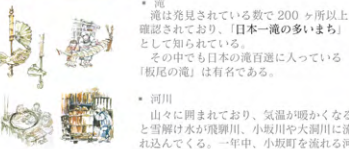
気候は全国的に見て夏は涼しく、冬は雪が降りくると寒い。理由として、標高が高く山々に囲まれていることが挙げられる。水害も多く、数年に一度大雨が降り、土砂崩れや河川の氾濫が起これる。



暮らし
開取りの特徴としてまず「どう」の正面に**開き裏がある**ことである。米客があったときには家族団圓や食事の様子が丸見えになっていたが、冬の寒さが厳しい地域であったこと、家族ぐるみでもてなす人慣などからこの開取りになったと言われている。



なんど	へや	へや	おくのま
かつては	たいてい	おえ	なかのま
	いさ	いさ	
まや	どうし	でい	おくてい



どうしは出入り口でもあり仕事場でもあった。雨が降ってきたときは、外に干してある農作物などを取り込むところでもあった。

住宅の土間口は一開幅の戸があった。

便所においなどの問題から屋外に造られるのが普通であった。

家は火災から家財を守るため建物を土で塗り込み、屋根は瓦を長く、置き屋根とした。壁や扉は厚い土で塞ぐなどして蔵の内部に入らないように造られていた。

味噌や醤油置き場や漬物置き場などが住宅内に見られた。



etc....

自然記念物

文化財

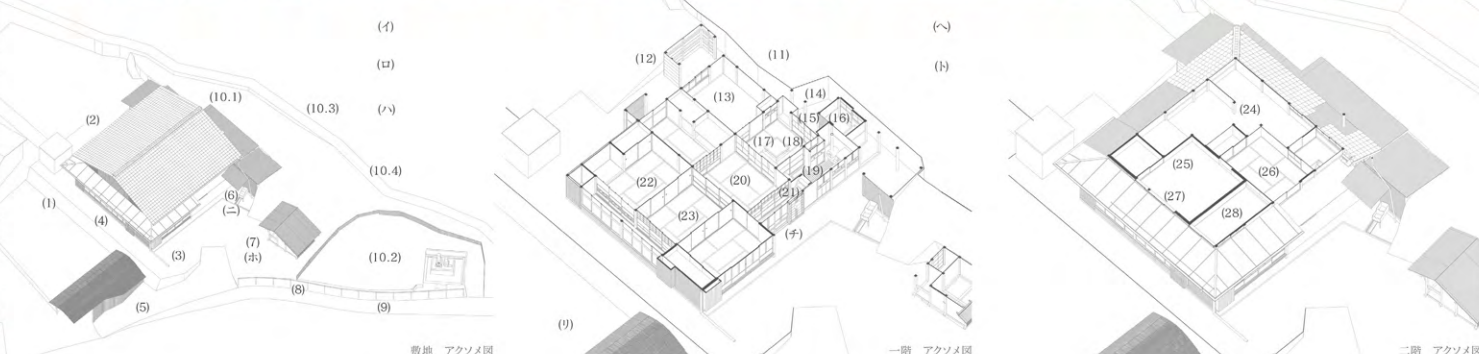
04-c それぞれのインテンション

歴史インテンション

(イ)	夏は風が涼しいこと。
(ロ)	冬は雪が降り寒いこと。
(ハ)	森林を活かして暮らしていること。
(ニ)	水溜りや噴霧であること。
(ホ)	トイレが屋外にあること。
(ヘ)	家財を守る土蔵があったこと。
(ト)	仕事場として土間のある暮らしをしていた。
(チ)	玄関ドアが戸外であること。
(リ)	暖かい囲炉裏に集まって暮らしていたこと。

歴史インテンション

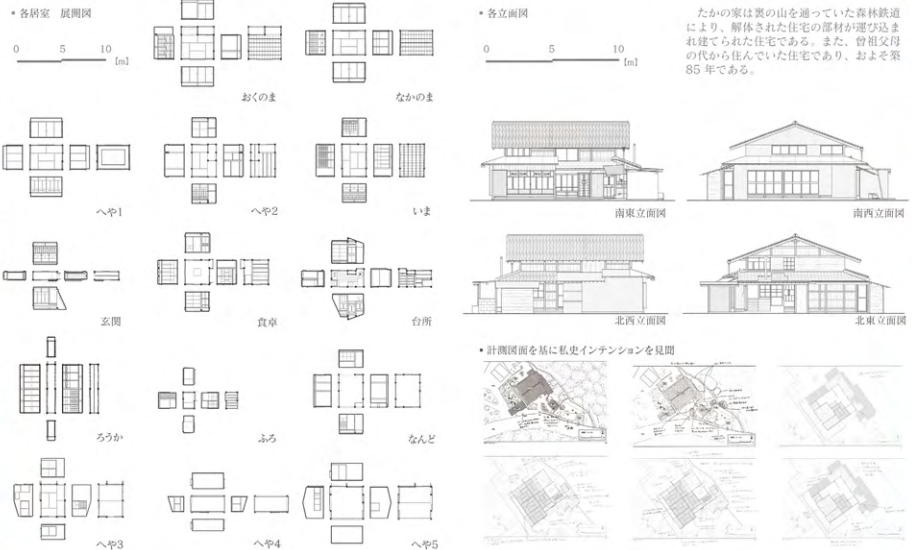
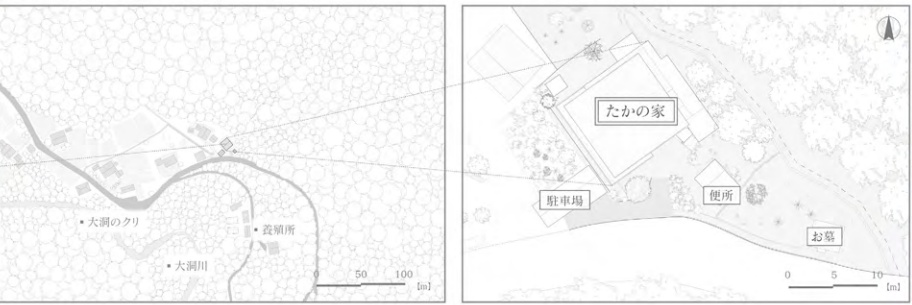
(1)	開延びした切妻屋根が住宅のシンボルとなっている。
(2)	裏壁はアクセスが悪いので、いかない。
(3)	玄関前で遊んでいた。
(4)	道が細く、構もない、為あまり通らな。
(5)	急なスロープであり、上るのに一苦男。冬は雪で滑りそうになる。
(6)	滝の湧き水を使い、生活をしていること。
(7)	トイレが屋外なので、雨の日は傘をさし、雪の日は雪をかきながらトイレに行った。
(8)	お墓への一本道前にトタンのゲートがある。
(9)	道は一本道で細く、マシカいるので気を付けて歩く。



04-b 私史インテンション

research

たかの家の私史インテンションを抽出する。



たかの家は裏の山を穿っていた森林鉄道により、解体された住宅の部材が運び込まれ建てられた住宅である。また、曾祖父の代から住んでいた住宅であり、およそ築85年である。

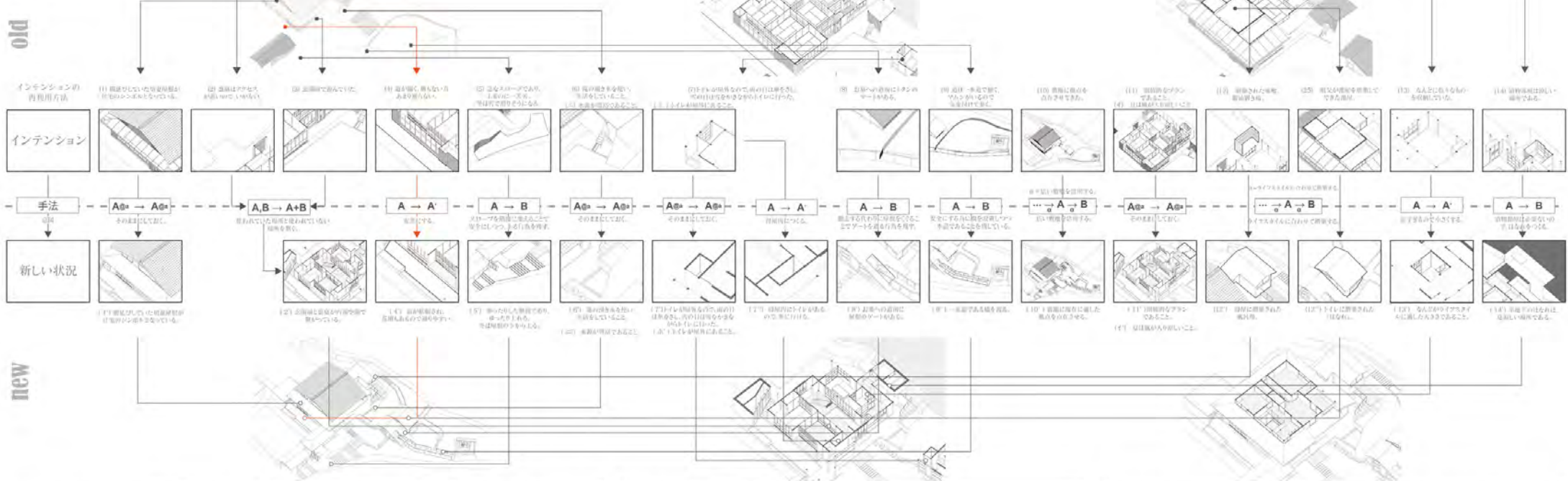


- 各種機能
- I. 駐車場 h. なんと
 - II. 便所 h. 食卓
 - III. お風呂 i. 台所
 - IV. 倉庫 j. 味噌醤油置き場
 - a. おくのみ k. 漬物置き場
 - b. なかのま l. 風呂場
 - c. へや1 m. へや3
 - d. へや2 n. へや4
 - e. いま o. へや5
 - f. 玄関 p. 物置
- 縮尺・方位
-

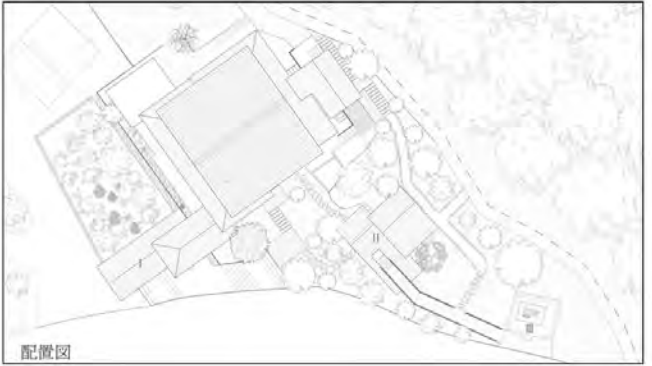


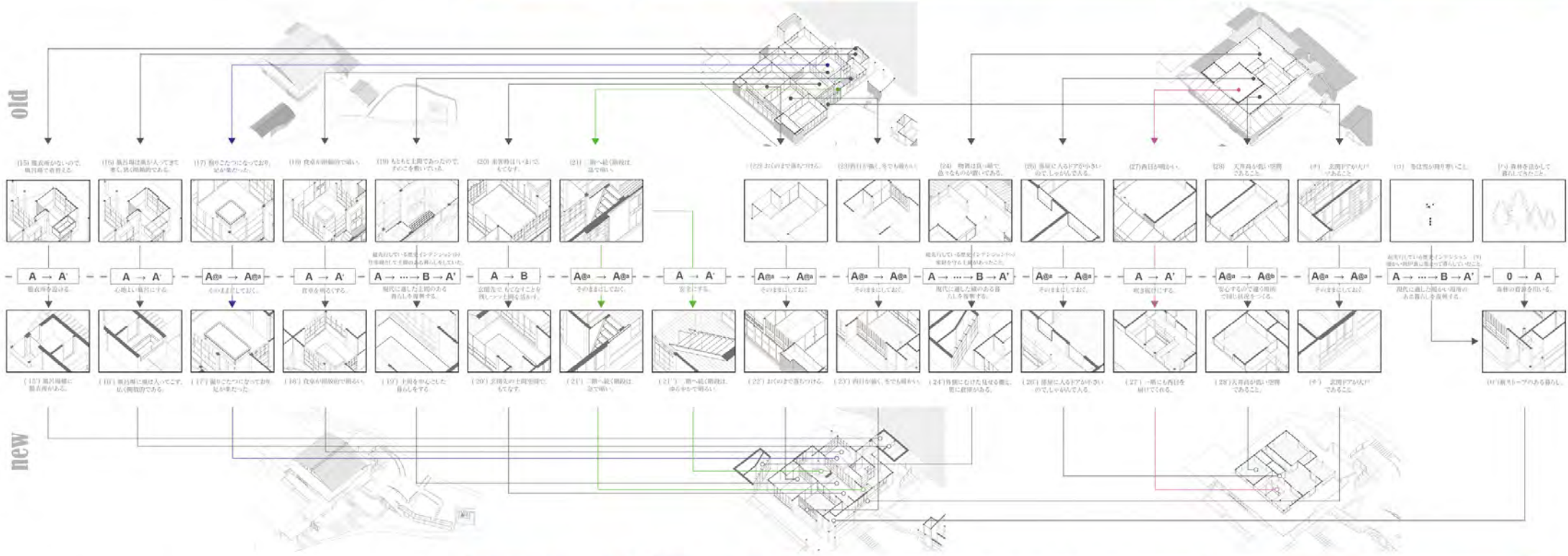
05 たかの家の再利用 design

それぞれのインテンションに対して、適切な手法を用いることで再利用の提案を行う。



- 各種機能
- I. 駐車場 h. 台所
 - II. はなれ i. はなれ
 - III. お風呂 j. へや1
 - a. 倉庫 k. へや2
 - b. おくのみ l. 湯沸1
 - c. いま m. バルコニー
 - d. 便所 n. 脱衣所
 - e. 玄関 o. 風呂場
 - f. 食卓 p. テラス
 - g. なんと q. 湯沸2
- 縮尺・方位
-





06 インテンションを用いた再利用を通して summary

本計画は、建築の再利用視点から建物の時間を進めていく「建築の再利用行為」の新しいリソースとして、オプティミストではない「インテンション」という概念を提示した。また、そのインテンションの活用手法を明示し、その一環として設計提案を行うことで、明確な手法がない建築の再利用行為における一つの手法として提示した。

インテンションを用いて住宅を再利用することは、それぞれのインテンションに対して応答していくといった、一貫すると統一性のない小技の手法に思われるかもしれない。しかし、こうした小技があることこそ、インテンションを用いて住宅を再利用することの醍醐味なのだ。例えば体の一部に不調が見つかった時、そこを診断して部分的に体を良くしていく。このように、インテンションによる住宅の再利用方法は、各インテンションを診断していく、それそれに対して適切な手法を用いることで、一つ一つの思いや面を受け継ぎつつ(継承)、住宅全体がライフスタイルに適した状況をつくりだしてくれる(更新)。

